

「文明の揺籃から新しきシルクロードを」

アンカラ大学での講演

尊敬するセリーン総長、日本大使はじめ諸先生方、本日は、まことにありがとうございます。ただ今、「トルコの父」ムスタファ・ケマル初代大統領の創立された伝統あるアンカラ大学より、名誉博士号を拝受いたしました。ここに謹んで御礼申し上げます。

更に、このように講演の機会をいただいたことは、私の最大の光栄であり、喜びであります。セリーン総長をはじめ関係者の皆さま、またご列席の方々に、心より感謝申し上げるものであります。

さて、トルコの事情に通じた日本の識者である大島直政氏は、貴国を「遠くて近い国」と呼んでおります。確かに両国は、地理的にアジア大陸の片や西端、片や東端と遠く隔たっていますが、文化的、民族的な距離は驚くほど近い。

3カ月ほど前、貴国出身の著名な人類学者であるハーバード大学のヌール・ヤーマン教授と懇談する機会がありました。その際、話題になったのも、両国の親近性であります。トルコ民族の源流も中央アジアであり、また、両国が悠久なる民衆の交流の道・シルクロードで結ばれているゆえんでありましょか、言語や風俗、習慣面で不思議なほどの類似性が見られる。教授は、両国は“自然の同盟国”であると表現しておられました。

加えて、トルコの人々が、友情をことのほか大切にされることは、周知の事実であります。アルカダシュルク(同志・友人関係)という言葉に示される、信義と友情を重んじ、かつ勇健の心に富んだ貴国の精神性を、私も深く敬愛する一人であります。

近代日本とトルコが交流を始めてから100年余、貴国から送られる友情のエールに比べて、我が国からの“発信”は、あまりに弱かったと言わざるを得ない。

私は、これまで微力ながら、創価大学や民音などを通じて、貴国との文化交流に尽力させていただきましたが、新しい世紀の両国の友好に更に全力で貢献しゆく決意であります。

ところで、世紀末の今日、激動の20世紀は、我々に何を要請しているのでしょうか。

それは、セリーン総長が、一昨年、創価大学での講演で、「絶対的な単一の権力や主張の時代から、大衆の英知による意思決定の時代へ」と指摘されたように、富や権力といったハードな手段に頼るのではなく、システムやルールなどのソフトな手段による、新たな平和的秩序形成であるといえましょ。

現代、不完全ながら、国連が体現している国際的なシステムやルールを、より広く、緊密に作り上げていくところにこそ、平和への王道があると私は思っております。私ど



もも、NGO(非政府組織)として、国連への協力・支援を一貫して行ってまいりました。

「普遍性への志向」と「開かれた精神」

更に、そうしたシステムやルールを構築していくためには、それらを待望する世界の世論、また、その支えとなる精神的基盤や時代精神が培われていかねばならない。そうした観点から、私は貴国の国是ともいべきケマル主義に、改めてスポットを当ててみたいと思います。

なぜなら貴国は、ビザンチウム、コンスタンチノーブル、イスタンブールの3つの名をもつ大都市が象徴しておりますように、まさに東西の十字路の要衝に位置してきました。

また、700年前の貴国の民衆詩人エムレが、「私は争うためにこの世に生を受けたのではない愛することこそわが人生の使命である」と謳い上げたように、普遍的なヒューマニズムが脈動している大地であります。

その地に生まれたケマル主義の本質は、単なる西欧化にとどまらず、長期間の治乱興亡が交錯する歴史的体験によって育まれた卓越した選択であり、文明の揺籃が放つ光彩であると思うからであります。

ケマル主義が、(1)共和主義、(2)民族主義、(3)人民主義、(4)国家企業主義、(5)世俗主義、(6)革新主義、の6つの柱から成ることはいうまでもありませんが、私は、そうした制度面の奥に、静かではあるが確たる流れを通わせている普遍性への志向、開かれた精神ともいべきものに注目したいのであります。

ケマル・アタチュルク大統領の悲願は、一にも二にもトルコ民族の覚醒にありました。にもかかわらずケマル主義は「古い友人と仲よくし、新しい友人をつくれ」との大統領のモットーに見られますように、偏狭な民族主義に陥らず、普遍的なグローバリズムへと、門戸は大きく開放されてい

たのではないのでしょうか。

私が、そう申し上げる第一の理由は、ケマル主義を濃密に染め上げている優れたバランス感覚にあります。初代大統領は、勇猛にして果敢な実践家であり、時には鬼をも抑えゆく激情の人でありました。同時にその行動は、強い意志力によってコントロールされていた。すなわち、そこには常に透徹したバランス感覚が働いていました。

史上、ケマル大統領ほど、己が事業に左右されなかった人は稀有であります。まして、その事業たるや、トインビー博士が、西洋における「ルネサンス」と「宗教改革」、「科学革命」、「フランス革命」、「産業革命」を一代で成し遂げようとした、と驚嘆したほどの偉業であったことを考えれば、そのバランス感覚、自己抑制力は、特筆大書されてよいのであります。

ほぼ同世代の権力者であったヒトラーやムッソリーニ、スターリンの無残な姿とは、あまりに対照的です。彼らが、権力の魔性のとりことなって破滅への道を転がり落ちていったのに対し、ケマル・アタチュルクは、同じく強大な権力を手にしながら、明らかに魔性の何たるかを知っていた。

有名な晩年の権力譲渡——トルコの近代化、民主化を進めるために一党独裁を廃し、すすんで野党をつくろうとしたことは、その象徴的な事例であります。残念ながら、その試みは、時期尚早で成功には至りませんでした。絶対的権力者が自らすすんでその座から降りようとしたことは、類例のない壮挙として近代史に厳然と刻まれていくことでしょう。

バランス感覚の事例は、これに限りません。

オスマン帝国時代の苦い経験から、外国資本の導入など外国からの介入には警戒心を働かせながら、こと教育となると外国人教師を積極的に迎え入れた開明性も、偏見の排外主義者にはとうてい不可能なバランス感覚、自己抑制の帰結であったと思うのであります。

更に、新生トルコの領土確保の後には、外に向かって武力を行使したことは一度もない。また「パン・トルコ主義」のようなものに与しなかったことも、優れた見識であり、バランス感覚であります。

こうした資質こそ、実は、現今の地球時代が差し迫った要請としていないのでしょうか。なぜなら、バランス感覚や自己抑制とは、独りよがりの独善や偏狭を厳しく退け、他との比較のうえから自己を客観視しつつ、全体の中に己を正しく位置づけていく能力のことだからであります。

そうした能力の人にして初めて、自国と世界、個別と普遍とのバランスのとれた開かれた精神をもち、普遍的なグローバルイズムを志向しようと思うのであります。そして、国際関係を正しく公平に取りしきるシステムやルールは、そのような精神的基盤のうえにのみ可能になると、私は信じております。

初代大統領の遺志を継いだ2代のイノニユ大統領の手によって複数政党制が導入され、選挙による政権交代が実現したとき、トインビー博士は、その画期的意義を「政治で

の公平と中庸という観念についての記念すべき勝利」（『世界と西欧』吉田健一訳、『トインビー著作集』6所収、社会思想社）と評しました。

ここに言う「公平」や「中庸」が、私の申し上げたケマル主義の普遍性への志向や開かれた精神の、重要な構成要素であることは、いうまでもありません。

「民衆」こそ「グローバル意識」の大地

第二に、ケマル大統領が、開明的なリーダーとして、常に民衆の側に立ち続けておられたということでもあります。普遍性といっても、上空を飛翔するように広がっていくものではない。

民衆の大地に浸潤し、民衆の心から心へと伝えられることによって国境を越え、地球を結んでいく。その意味から、民衆こそ普遍的なるものの「大地」であり「母」なのであります。

私は、かつて、我が内なる民衆像を、こう謳い上げました。

民衆よ——

君こそ現実だ

君とはなれて現実の世界はない

.....

君のいない科学は冷酷——

君のいない哲学は不毛——

君のいない芸術は空虚——

君のいない宗教は無慙——

それだけに、1926年8月、ケマル大統領が国民議会で行った、かの有名な演説には、強く強く、心を揺さぶられるものがあります。

「——偉大なる運動はすべてその根を人民の心の底深くおろすべきである。それこそは、あらゆる力の、あらゆる偉大さの根源なのだ。それを措いては、がらくたとほこりとしか存在しないのである」（ブノアメシャン『灰色の狼——ムスタファ・ケマル』牟田口義郎訳、筑摩書房）と。

この不敵な自信が、彼の比類なき実績から生まれていることは、いうまでもありません。

民衆の中へ飛び込み、戦場においても、政治や教育の現場においても、彼らと一緒に戦い、苦楽をともにし、民衆の一人一人にトルコ人であることの自覚と誇りを促した点において、ケマル大統領の名は、永遠の光であります。

ケマル大統領は勇躍挺身して、戦いに倦み疲れ、自失状態にあったトルコの人々を勇気づけました。民衆の心の持ち方を一変させることによって、故国を存亡の危機から救い出し、新生トルコの建設へと向かわしめたのであります。そして、このように、自覚した民衆と民衆は、それぞれの美質を光らせながら、必ずや世界市民のスクラムを組んでいくにちがいない。

目覚めた民衆の存在というものは、必然的に普遍的な連帯を招き寄せるからであります。それは、一つの法則であります。それには、何といっても教育であります。

ケマル大統領の民衆との共戦のなかに、私が普遍的なる

ものへの鼓動を聴き取るのは、そこにあつて、教育が極めて重要視されていたからであります。一見、急進的に見えるケマル革命も、教育を機軸にした漸進主義を基調としておりました。革命の成功をもたらした一番の秘密は、そこにあつたのではないのでしょうか。

民族といい、文化といい、個別的なるもの同士が接触し、普遍的なるものへと昇華していく回路は、対話を含む広い意味での教育による以外ない。

ヌール・ヤーマン教授と深く同意あつたのも、この一点でありました。教授は「教育によってこそ、人は背景の違いを超えて『共通』のものを発見する。何かの『流派』に所属しているだけの状態から脱して、人間という次元で考えられるようになる」と。まさに至言であります。教育こそ、普遍的なるもの、そしてその開花である世界平和への無二の回路なのであります。

実際、一大文化革命ともいべきケマル革命の多くの側面で、教育革命ほど目覚ましい成果をあげたものはないのではないかと私は思います。

率先して、黒板とチョークを手に、トルコの大地を駆けめぐり、庶民に、自ら考案したトルコ式ローマ字を教えた、あの崇高なる姿が、私の胸に鮮やかに蘇ってくるのであります。

ケマル主義は教育によって「新たなトルコ人」「新たなトルコ」の建設を目指しました。そして、その先には、一国の枠を超えた普遍的な価値としての「文明」が想定されました。

1921年、初代大統領は述べました。民族同士の長年にわたる敵対感情をぬぐい去るには「軍事的勝利によってではなく、ひとえに、近代的知識と文明とが要求することをすべて達成すること、そして、あらゆる文明民族が実現した文化的水準へ、実際に到達することによってである」と。

ここには、文明化することによって、トルコ人が、世界市民として、グローバリズムを体現していくこと——つまり、良きトルコ人であることが、同時に良き世界市民へと通じていく理想的な方向性が、おおらかにうたわれております。

文明の進歩、人類の進歩へのこうした楽観的な見方は、確かに、シュペングラーの『西欧の没落』に象徴される、ヨーロッパ中心の進歩史観の崩壊以前のものであります。その後の歩みを見ても、歴史の進歩というものは、決して上り坂を一直線に行くような単純なものではない。

また、今世紀の文化人類学は、西欧的価値観の一元的な支配を突き崩し、文化に優先順位なるものはないとする、いわゆる「文化相対主義」の潮流を不動のものとしつつあります。

そのうえで私が指摘したいのは、ケマル主義の「初心」、すなわち普遍性を志向しつつ、開かれた精神をもって、世界史の主流に参画していこうとした、かの、みずみずしい「初心」であります。

それは、単なる理想ではなく、歴史上の一つのモデルが想定されていたにちがいないと思うのは、私一人でありましょうか。若き日のケマルがむさぼるように勉強し、新生トルコの憲法や教育制度が範を仰いでいる「大革命」時の

フランス及びフランス人こそ、それではなかったでしょうか。

今世紀フランスの優れた哲学者シモーヌ・ヴェイユは言います。

「大革命は、フランスの王冠のもとに服していた各地域の住民を唯一つの集団に融合した。しかもそれは、国民の主権にたいする陶醉を通じておこなわれたのだ。

強制によってフランス人であった人びとは、自由なる同意によってフランス人となった。フランス人でなかった人たちの多くが、フランス人になることをのぞんだ」（「根をもつこと」山崎庸一郎訳、『シモーヌ・ヴェーユ著作集』V所収、春秋社）と。

当時のフランス人という言葉は、それほど魅力的な普遍性の響きを帯びていたようであります。

このフランス人をトルコ人と置き換えれば、彼女の文章は、そのまま、新しいトルコ及びトルコ人を創出しようとしたケマル大統領が構想したところを、鮮やかに映し出していると私は信ずるのであります。

ともあれ東西文明の十字路口に位置してきた貴国の役割は、近年、一躍クローズアップされてきました。

私は、それが単なる経済的な利害関係や、宗教的・民族的絆のみによるものではなく、ケマル主義が体現している普遍性、開明性にも大きく起因していると見ている一人であります。

そうであるかぎり、流動化を強めつつある昨今の動きは、貴国の基本路線である「内に平和を、外に平和を」の大いなる前進となる。ひいては日本をも交えて「文化交流」と「相互理解」の「新たなシルクロード」を、人々がにぎわい行き交う、夢躍る未来さえも予感させるのであります。

その「精神のシルクロード」においては、「人間の尊厳」「自然との調和」、また「未来の世代への責任」などの価値観が、深く広く、共有されていくことは当然でありましょう。それは、環境問題をはじめとする「地球の問題群」打開への連帯にも通じていくと信ずるのであります。

私も、世界平和への貴重な一里塚として、微力ながらそのために、全力をあげて貢献していく決心であります。

最後に、その思いを、再びエムレの詩の一節に託し、記念のスピーチを終わらせていただきます。

「世界は私の生命の支えである
世界中の人々は私と同じ民族なのだ」――

ご清聴、ありがとうございました。

*エムレの詩については、次の文献を参照した。

(注1) Talat Sait Halman, The humanist poetry of Yunus Emre (Istanbul: Istanbul Matbaasi)

(注2) The City of the Heart: Yunus Emre's Verses of Wisdom and Love, translated by Sühasaiz (Rockport: Element Books, 1992)